

無着の唯識哲學における中心思想

鈴木宗忠

五

無着の悟界論は、これを唯識思想で表示すると、既に述べた如く、それは單に唯識性となつて居る。この點においては世親の悟界論が、一面唯識性で表示せられると共に、他面唯識義で表示せられるのは相違する。勿論その内容から云へば、無着の悟界論も、世親のそれと異なる所はない。即ちそれは世親が唯識性で表示する所觀の唯識境の面を有すると共に、その唯識義で表示する能觀の唯識智の面をも有する。たゞこゝで注意すべきは、無着の悟界論に於て、唯識性の用ひられるのは、その包容する範圍が、前者の所觀の唯識境の面を除き、單に後者の能觀の唯識智の面に限られて居ると云ふことである。然らばこゝでは所觀の唯識境を表示するのに、如何いふ語が用ひられるかと云ふに、それは眞實性である。この點に於ても、無着の唯識哲學は、彌勒のそれに近い所がある。それは何れにしても、私がこゝで無着の悟界論を明にするには、單に唯識性で表示せられる能觀の唯識智を述べるに止まらないで、同様に眞實性で表示せられる

所觀の唯識境も述べなければならぬ。

無着の所觀の唯識境が眞實性で表示せられることは、彼に在つては、眞實性が眞如と同一視せられることから、これを知ることが出来る。攝大乘論には、隋譯に依ると

(對譯攝大乘論四一頁)、

云何應^レ知^ニ成就^ノ性[、]若^シ說^ニ四^種清淨^ノ法[、]應^ニ知^ニ四^種清淨^ノ法[、]一^本性清淨[、]所^謂眞^如空^實際^無相^第一^義

淨法者、一^本性清淨、所^謂眞^如空^實際^無相^第一^義法界等。

とある。これを解釋すると、無着に依れば、眞實性に就いては、四種の清淨法を説くことが出来る。彼がこれを説くやうになつた事情に關しては後に述べることにするが、兎も角この四種の清淨法の第一が本性清淨で、この點から云へば、眞實性は多種の稱呼を有するが、その隨一が眞如である。今の目的の爲めに、この際特に強調すれば、無着に在つては、眞實性は眞如である。既に眞實性が眞如であるとすれば、無着は所觀の唯識境としての唯識性を表示するのに、眞實性の語を用ひたことになる。何故なれば、唯識哲學の中心思想を表示するのに、標準

的に唯識の語を用ひた世親に依ると、眞如は所觀の唯識境としての唯識性であるからである。唯識三十論頌の第二十五頌に、

Dharmānāṁ paramārthaś-casū yatas tathatāpi
sah 1

Sarvākāraṇī tathābhāvāt sa-eva vijñapimātrikā 11
次にこれが諸法の眞諦である、故にそれは又眞如である、一切時に如是であるが故に、それのみが唯識性である。

こゝで考へたことは、無着が眞實性に就いて、四種の清淨法を説くやうになつた事情である。彼に依れば、眞實性には二種がある。一は本覺眞實性とも云ふべきもので、彼はこれを本性成就と稱し、二は始覺眞實性とも云ふべきもので、彼はこれを清淨成就と稱する。攝大乘論には、隋譯に依ると(對譯攝大乘論三七頁)、

成就性亦二種、本性成就故、清淨成就故、是名成就性。

とある。二種の眞實性は、更に分けると、四種となる。それが四種の清淨法である。攝大乘論には、隋譯に依ると(對譯攝大乘論四一頁)、

四種清淨法者、一、本性清淨、所謂眞如空實際無相第一義法界等、二、離垢清淨、謂即是離一切障垢、三、至得道清淨、謂一切菩提分法波羅蜜等、四、道生境界清淨、謂所說大乘正法。

とあるのがそれである。これをかの二種の眞實性に對比すると、第一の本性清淨は、本性成就に當り、後の三清淨は、清淨成就に當る。本覺眞實性に就いては、こゝでは特に述べるの要はないが、始覺眞實性に就いては、少しく説いて置かねばならぬ。始覺眞實性に當る三清淨の中で、始の離苦清淨は、始覺修證の結果を示したもので、始覺が本覺に一致した所である。中の至得道清淨は、始覺に至るべき道であり、終の道生境界清淨は、この道を説いたものである。かくして無着に在つては、唯識性としての眞如が得られることになる。

然らば無着のこの唯識性としての眞如は、何れに由來したかと云ふに、それは確に彌勒の思想を繼承したものである。中邊分別論第一相品第十四頌に、空性の異門として、所觀の唯識境としての唯識性の稱呼が列擧せられる。即ちこれに、

Tathatā bhūtakoti ca-nirmitān paramārthatā 1
Dharmadhātus ca pariyāyāṁ śmṛtyāyāṁ samāsā-

tab. II

眞如と實際と無相と勝義と

法界と空性の異門が略説せられる。

とあるのがそれである。彌勒の空性と云ふのは、既に述べた如く、世親の唯識性のごとく、無着の所觀の唯識境としての眞實性に當る。尤も彌勒も三性を説き（中邊分別論第一相品第五頌）、眞實性を考へては居るが、彼が果して無着のやうに、これを所觀の唯識境としての唯識性としたか否かは明でない。それは暫らく措き、今この彌勒の空性の異門をば、私が前に述べた無着の本性清淨の上から見た眞如等の眞實性の稱呼と比較すると、二者は次の如くに一致する。

彌勒 眞如、實際、無相、勝義、法界。

無着 眞如、空、實際、無相、勝義、法界。

たゞ異なる所を云へば、無着に於ては、眞如の次に、彌勒にない、空と云ふ稱呼のあることである。然しこれも彌勒がこれ等の總稱として空性を挙げたことを顧慮すると、二者は完全に一致することになる。かやうに考へると、無着の所觀の唯識境としての眞實性と云ふ稱呼が、彌勒から出たことは疑はれない。このことは更に無着のこの眞實性に關する性質をば、彌勒の空性異門義に比較する

と、一層明になる。中邊分別論第一相品第十五頌に、

Ananyatāhā-viparyāsā-tannirodhā-āryagocaraṇā |

Hehuvāo-ca-āryadharmānāni-paryātho yathākramāni ||

man. II

不變異と不顛倒とその滅と聖行境との故に、

又正法の因の故に、異門の説は次第の如くである。

とある。これに對して、攝大乘論には、隋譯に依ると

〔對譯攝大乘論三六頁〕、

若成就性_ニ分別性_ニ畢竟無_ニ所有_ニ爲_ニ相_ニ、云何成_ニ成就_ニ、何因緣_ニ說_ニ名_ニ成就_ニ、體_ニ無變異_ニ故得_ニ成就_ニ、清淨境界_ニ故、一切善法中_ニ最勝義_ニ故、說_ニ名_ニ成就_ニ。

とある。二者を比較すると、無變異と勝義とは一致するから、固より論はないが、無着の清淨境界は彌勒の法界に當るであらう。さうすると無着では、彌勒にある不顛倒と相滅とがないことになるが、これは省略したもので、彼も彌勒と同様に、空性異門義を考へて居たものであると推定しても、決して不當ではないであらう。

然しこゝに無着の所觀の唯識境としての眞實性に關し、注意すべき一の問題がある。それは無着のこの眞實性の思想は、かやうに彌勒の空性のそれから由來したものであるが、その性質は、彼と此との間に、著しい相違の

存すると云ふことである。先づ彌勒の空性から述べると、彼に在つては、空性の性質は、一般に云へば、無 *Abhāva* であるが（中邊分別論第一相品第十三頌）、その特殊性の現れるのは、空性と迷界との關係である。既に述べた如く、彌勒は迷界を表示するのに、分別と云ふ語を用ひるが、他の唯識哲學に於けると等しく、これを具體的に表示する場合には、雜染と云ふ語を用ひる。雜染に對しては、空性と稱した悟界をば、清淨と稱することもある。彼に依れば、悟界と迷界との關係は、分位の差別に過ぎない。中邊分別論第一相品第十六頌に、

Sanhīṣiṣā ca viuddhā ca sū samānā nirmalā ca |

Ab-dhātu-kamaku-ākāṣā śuddhivac oṇuddhir iṣyate ||

雜染と清淨とはそれは有垢と無垢とである。

水界金空の淨の如くに淨と許される。

とある。これを解釋すると、元來空性としての眞如は、清淨なものであるが、分位の別に依つて、雜染となる。即ちそれに垢の附いた所が雜染であり、この垢の取れた所が元の清淨である。これがこの偈頌の前半の意味であらう。さうすると眞如は前には垢と相應し、後には垢を出離することになるから、それは變異であつて、無常なものとなり、眞如常住の性質と相違するのではないかと

云ふ疑問が起る。この疑問に對して與へられた回答が、この偈頌の後半であらう。これに依ると、眞如は或は雜染となり、或は清淨となるからと云つて、變異性を有するものでもなければ、無常性を有するものでもない、それは他くまでも常住である。例へば水界とか、金とか、空とかの如きものである。水界は淨であるが、これに塵がかゝると、染となる。金も淨であるが、これに垢が附くと、染となる。同様に空も淨であるが、雲がこれを覆ふと、それは染となる。然し此等は何れも一時染となるだけであつて、その性質が變異して染となるわけではない。それと同様に、眞如は元來清淨なものであるが、偶然に起る煩惱の爲めに、所謂客塵煩惱の爲めに、一時それが覆はれて、雜染となるだけであつて、性質が變異するのではない、性質としては、それは何處までも清淨なものとせられるのである。約言すれば、清淨な眞如である悟界は、煩惱の爲めに、雜染である迷界となるわけであるから、二者の用には、融通連絡が存する。

次に無着に就いて述べると、彼の悟界とする眞實性は、その一般の性質を云へば、彌勒に於けると等しく、無ではあるが、その特殊性としての悟界と迷界との關係、即ち眞實性と依他性としての唯識との關係に就いては、無

着と彌勒との間には、異なるものがある、無着に依れば、悟界と迷界との關係は、性と相との關係である。換言すれば、眞實性は唯識である依他性の本性である。

このことは彼が眞實性を以て悟界とすることの當然の歸結であるとも云ふべきものである。何故なれば、彼は依他性の上に、この眞實性を立てるからである。攝大乘論に依れば、隋譯に（對譯攝大乘論二九頁）、

此中何者是成就相、即此依他相中、彼義相畢竟無所有故、

とある。これを解釋すると、依他性は唯識であつて、外境はない、外境の無い所に、有るとせられる外境が、分別性である。そこでこの依他性に於て、無所有の境の無くなつた所が眞實性である。換言すれば、依他性の中で、相として外に現れた所が、分別性としての迷界であり、それと同時に、この依他性の中で、性として内に隠れて居るものが、眞實性としての悟界である。故に攝大乘論には、隋譯に（對譯攝大乘論四三頁）、

依他性中、分別性は染汚分、成就性は清淨分、

とある。分別性は染汚分であるから、これは迷界で、依他性の中では、これはその外に現れた相であると云ふことが出来る。これに對すると、眞實性は清淨分であるか

ら、これは悟界で、依他性の中では、これはその内に隠れた性に外ならない。攝大乘論では、この關係を地金土に譬へて居る。その隋譯に依ると（同上）、

如_三金土藏有_二三種_一可見、謂_一地界、二土、三金、於_二地界_中、土非有_一而可見、金寶有_一而不可見、

とある。これを三性にあてはめると、地は依他性で、土は分別性、金は眞實性である。分別性は土の如く、依他性である地界の假相で、本來は非有であるが、衆生の上から見ると、迷の爲めに可見となる。これに反して、眞實性は金の如く、依他性である地界の本性で、本來は實有であるが、衆生の上から見ると、迷の爲めに不可見となる。

かやうに依他性を中心として考へると、分別性がその假相として非有であり、眞實性がその眞性として實有であることには論はない。こゝで問題になるのは、依他性そのものゝ性質である。成程依他性は非有の分別性から見ると、確に有である。然し實有の眞實性から見ると、實ではなくして、假である。換言すれば、依他性は假有である。故に本性の眞實性から見ると、依他性は分別性と共に、假相の中に這入る。無着に在つては、迷界を狹義に解すると、それは分別性であるが、普通にはこれを

廣義に解し、所分別の分別性と共に、能分別の依他性もこれに入れられる。相識と共に、見識もこれに入れられる。寧ろ適切に云へば、迷界は分別であり、識である。即ちそれは唯識としての依他性である。さうすると迷界としての依他性と悟界としての眞實性との關係は、無着に依れば、結局相と性との關係となるわけである。

こゝになると無着の思想は、その先蹤者である彌勒から離れて、その後繼者である世親と接近すると云ふべきである。何故なれば、世親も迷界としての依他性の本性は、悟界としての眞實性であると考へるからである。唯識三十論頌の第二十二頌で、

Ata eva sa na-eva-nyo na-ananyah paratantra-

taḥ |

Antyātādīvad vācyo na-adīśṭe'min sa dīśyate ||

故にそれは（眞實性）依他と異でもなく不異でもない。

無常等の如きものであると云はれる、此を見なくては彼は見られない。

とある。これに依れば、迷界としての依他性と悟界としての眞實性との關係は、不二不異であると共に、それは五蘊と無常性等の如きものであるから、相と性との關係

となる。換言すれば、世親に在つても、私の前に述べた無着の場合に於けると等しく、悟界としての眞實性は、迷界としての依他性の本性となる。寧ろ適切に云へば、この思想は無着に現れ、世親が繼承したとすべきである。然しこゝに注意すべきは、この思想は、既に彌勒に於ても、少くともその萌芽は存したのではないかと云ふことである。中邊分別論第一相品第十三頌の末句に、

na pīṭhagokalaśaṅgam || 颯一の若でない。

Drayābhāvo hy abhāvasya ca bhāvaḥ śūnyatā-

śaṅgam |

Na bhāvo nāpi vābhāvaḥ..... ||

二の無と空の有とは空相である。

有でもなく亦無でもない。……

の結末をなすものであるが、その意味は前後の關係から見ても、悟界としての空性と迷界としての虚妄分別とは、不二不異であることを示したものに違ひない。然らば悟界と迷界とは如何いふ關係に在るかと云ふに、その長行の解釋に依ると、若し空性と虚妄分別とが異なるならば、法性と諸法とが異なることになるが、この義は成立しない。例へば五蘊と無常性等とが異なるなきが如きものである。

又若し二者が一であるならば、法性が諸法の共相であると云ふ義も成就することなく、若くは空性が淨智の境であることも成立しない。かやうに解釋すると、彌勒も無着や世親と等しく虚妄分別を相とし、定性を性としたと一往は考へられるのである。

けれども私見に依れば、これは世親の彌勒解釋であつて、彌勒自身の思想ではない。迷界と悟界との關係が、相と性との關係であるとすれば、相から性へ行くことは、或は出来るかも知れないが、性から相へ行くことは、絶對に出来ない。換言すれば、二者の間には、融通連絡はない。このことは世親には確實にあてはまるが、無着にも大體あてはまるのではないかと思ふ。然るに彌勒になると、既に述べた如く、雜染としての迷界と清淨としての悟界との間には、融通連絡がある。雜染と清淨とは分位の別で、清淨が客塵煩惱の爲めに、一時雜染となるに過ぎないから、その煩惱がなくなると、再び元の清淨に還るのは當然である。さうすると中邊分別論第一相品第十三頌の「異一の相でない」と云ふ句と、唯識三十論頌第二十二頌の「異でもなく不異でもない」と云ふ句とは、共に迷界と悟界との關係を示すものとして、形式の上では同一であるが、内容の上では、相違すると云はねばなら

ぬ。即ち世親に在つては、それは明に相と性との關係を示すことになるが、彌勒に在つては、これと異り、それは少くとも迷界と悟界との間に、融通連絡のあることを妨げるものではない。然らばこの點に關し、無着の思想は如何かと云ふに、彼は先蹤者である彌勒を離れて、後繼者である世親に接近する。寧ろ適切に云へば、迷界と悟界との關係は、相と性との關係であるとしたのは、無着に始まり、世親になつて展開したと云ふべきであらう。

六

無着の悟界論の中心は、能觀の唯識智で、攝大乘論に於ては、それが唯識性と呼ばれて居ることは、私の既に述べた通りである。既に唯識性が唯識智であるとすれば、悟界が、即ち所觀の唯識境が、これに依つて顯現せられることは、特に論するまでもないであらう。悟界の顯現には、二の問題がある。一は悟界は如何して顯現するかと云ふことで、これは悟界顯現の過程に關する問題である。二は悟界の顯現は如何して可能であるかと云ふことで、これは悟界顯現の根據に關する問題である。この二の問題は、攝大乘論に於ては、如何に取扱はれて居るかと云ふに、既に述べた如く、攝大乘論は、總綱要分を除き、十分に別れる。今これを略稱で示すと、所知依

分、所知相分、入分、因果分、修差別分、戒分、心分、慧分、果分、智分がそれである。この中で、入分以下の八分が、悟界論である。悟界論と云ふも、何れも皆悟界顯現の過程に關するもので、その根據に關するものではない。然らば悟界顯現の根據に關するものは、攝大乘論には全く存しないかと云ふに、それは所知依分にも、所知相分にも、處々に散在する。然しそれは悟界顯現の過程に關するものとは異り、それ程に明瞭には現れて居ない。

先づ悟界顯現の過程から述べると、攝大乘論に於ては、既に述べた如く、それは入分以下の八分に詳説せられるが、大別すると二となる。行と果とがそれである。行は入分以下の三分に説かれ、果は果分智分の二分に説かれる。この點から見ると、無着の攝大乘論は、彌勒の中邊分別論に一致する。中邊分別論は、漢譯で見ると、相品、障品、眞實品、對治品、分位品、得果品、無上乘品の七品から成る。相品障品の二品は境で、これは迷界論である。眞實品、對治品、分位品の三品は行であり、得果品、無上乘品の二品は果であつて、これは悟界論である。さうすると我々が今無着の悟界顯現の過程に關して論ずるに際しては、彌勒の場合と共に、その行果の全體を涉獵

するのが、適當であるやうに思はれる。成程無着の唯識哲學をば體系的に論述しようとするならば、その悟界論に關しては、そのやうな方法を取るべきであらう。然し私のこゝで目的とする所は、彼の唯識哲學の中心思想を明にするが爲めである。換言すれば、唯識思想を規準として、その悟界論を究めようとするのが、今の目的である。この爲めには、行果を統合して、悟界顯現の過程をば行位として表示するのが、最も當を得たものではなからうか。行位は表面から形態として見たものであるが、裏面から内容として見ると、それは行方便に外ならぬ。攝大乘論では、行方便は因果分から慧分に至るまでの五分に詳説せられるが、行位になると、それは果分に關説せられる程度である。然し行果の大綱が、入分に説かれて居る。この入分は、謂はゞ無着の悟界論の總説である。これを科釋すると、大體に於て、それは正入、能入、入位、入方便の四となすことが出来る。この中で、今の目的に役立つものは、入位と入方便である。私は今入位を經とし、入方便を緯として、悟界顯現の過程に關する無着の思想を明にしたいと思ふ。

攝大乘論に於ては、行位は四階段となつて居る。信解行地、見道、修道、究竟道がそれである。第一の信解行

地を釋して、論には隋譯に依ると（對譯攝大乘論五三頁）、一切法唯識隨聞信解故。

とあるから、この行位が唯識觀に依つて居ることは無論であるが、その基く所は、追々に明にするやうに、大體に於て、當時の小乘佛教の思想であつたのである。この點から見ると、この行位觀は、唯識論に於ける世親のそれと相通するものがある。唯識三十論頌に於ては、行位は第二十六頌から第三十頌に至るまでの五頌に説かれる。悟界顯現に關する世親の思想は、こゝでは唯識義と云ふ表辭で示されるが、私は上來無着に對して用ひた表辭で示すと、それは能觀の唯識智に依つて、所觀の唯識境が實現せられることになる。私見に依れば、これには三の階段がある。一は唯識相の排棄であつて、それは第二十六頌から第二十八頌に至る三頌に説かれる。二は求められるべき唯識性の獲得であつて、それは第二十九頌に説かれる。三はかくして得られた唯識果であつて、それは第三十頌に説かれる。然るに護法の思想を中心として、唯識三十論頌を解釋したと思はれる成唯識論に依れば、それは資糧位、加行位、通達位、修習位、究竟位の五位とせられる。この分位は、こゝでは

何謂悟入唯識五位、一資糧位、謂修大乘順解脫分、

二加行位、謂修大乘順決擇分、三通達位、謂諸菩薩所住見道、四修習位、謂諸菩薩所住修道、五究竟位、謂住無上正等菩薩、

となつて居るから、それが小乘佛教の行位觀に基いたこととは明である。然しそれと同時に、それは攝大乘論の行位觀に隨順したことも疑はれない。何故なれば、成唯識論の五位説は、攝大乘論の四道説の中で、第一の信解行地を分つて資糧位加行位の二位となし、第二見道、第三修道、第四究竟道をば、順次に通達位、修習位、究竟位となしたものであるからである。殊に成唯識論が見道を通達位となすことは、攝大乘論に見道を解釋して、

如理通達故。

としたのに基いたことは無論である。

進んで無着の行位觀そのものに就いて考へると、攝大乘論に於ては、先づその入位段に、行位を列擧すると共に、その各の特色を述べ、次に入方便段に入つて、各行位の內容が詳説せられる。そこで第一の信解行地から始めると、これにはその特色として、入位段に、

隨聞信解故

と掲げられる。そしてその内容として入方便段に詳説せられるものは、相當に長文に涉つて居るが、大體これを

七節に分けることが出来る。即ち一、序説(對譯攝大乘論五三一四頁)、二、三種練磨心(五四頁)、三、滅除四障(五四一五頁)、四、緣法義(九五頁)、五、常修一四尋思(五五頁)、六、正修一四如實智(五五―六頁)、七、無放逸(五七頁)がそれである。成唯識論に於ては、既に述べた如く、この信解行地を分つて、資糧位加行位の二とする。これは一の序説に三種練磨心以下の細目を列ねる前に、善根力持故とあるが、この善根力持を資糧位とし、三種練磨心以下を加行位としたものであらう。如何してそうなるかと云ふに、善根力に就いては、入方便段には少しも説いては居ないが、これは因力、善知識力、正思惟力、止力の四善根で、入分の初に在る能入段には、隋譯に依ると(對譯攝大乘論五三頁)、

大乘多聞重習相續已故、得親近無量出世諸佛故、一向信解、善集善根故、善滿足福智資糧諸善薩、

とある。そして大乘多聞重習相續は因力であり、親近無量出世諸佛は善知識力であり、一向信解は正思惟力であり、善集善根は依止力であるから、成唯識論がこれに基いて善根力持を資糧位としたことは明である。こゝに注意すべきは、入分の最後に無着の行位觀の教證として引いた、大乘莊嚴經論の五偈である。この五偈は彌勒の行

位觀を示したものであるが、無着の四位説に對して、それは五位説となつて居る。これがやがて唯識三十論頌に於ける世親の五位行位觀の基礎になつたものであらう。それは暫らく措き、その初偈に、

Sambhīṭya sambhāvaṃ anantapīṇinī jñānasya
pūṇyasya ca bodhisatvāḥ |
Dharmaṣu cintāsviniśīkatvāi jñāpāṇvayāṃ artha-

gāṇi paratī II (S. A. VI. 6)

善薩は無邊際の智慧と功德との資糧を集めて、諸法に於ける思の善決擇の故に(意)言に隨順する(體)を了證する。

とあり、攝大乘論では、隋譯に依ると(對譯攝大乘論六〇頁)、

善薩具滿無邊際、福德智慧之資糧、
法中思量善決已、則了義類意言生、

とあるから、これも成唯識論の資糧位説の根據となつたことは疑はれない。成唯識論に於て、三種練磨心以下を加行位としたことは、六の正修一四如實智を説いた所に、隋譯に依ると、

菩薩如是如實爲入意言唯識故、修行云々
とあるが、唐譯ではこれを

以下諸菩薩如^レ是如^レ實爲^レ入^レ唯識^ニ勤修^ニ加行^ト云々
として居るから、こゝにその根據が存するであらう。たゞこゝで少しく解し難いのは、かやうに資糧位の内容が、善根力持に依る福慧とせられ、加行位のそれが三種練磨心以下の加行とせられるにも拘らず、成唯識論が資糧位の内容として、福慧の外に、

此位^ニ障^ヲ雖^モ未^ダ伏^ス除^ス修^ス勝^リ行^ニ時^ニ有^リ三^ノ退^屈而^モ能^ク三^ノ事^ヲ練^ス磨^ス其^ノ心^ヲ。

と云ひつゝ、三種練磨心を述べて居ることである。

加行位の内容は、加行であるが、更に剋實して云へば、成唯識論に依れば、それは二取を伏除することである。

即ちこれに

菩薩^ハ先^ニ於^テ初^ニ無^ク數^ク劫^ニ善^ク備^フ福^ヲ德^ヲ智^ヲ慧^ヲ資^ヲ糧^ヲ順^テ解^テ脫^ス分^ニ既^ニ圓^ク滿^ク已^ニ爲^テ入^リ見^道住^ニ唯^識性^ニ後^ニ修^シ加^行伏^ス除^ス二^ノ取^ヲ。

とある。その基礎になる唯識三十論頌の第二十七頌では、

Vijāpītmātram eva-īdam iti-opyi hi upalambh-
atah |

Sbhāpāyann-agra'uh kincit tannātre na-avastīṣṭha-
to ||

これは唯識であると思つても、有所得であるが故に、

その現前にあるものを立て、唯識後に住しない。となつて居るが、これに相應すると思はれる彌勒五頌の第二では、

Arhān sa viñhāya ca jalpanākrān santīṣṭhate
tambha oitamāre |

Pratyakṣātān eṭi ca dharmadhātus tasmād vī-
ukto dṛṣṭalaksheṇa || (S. A. VI. 7)

彼はまた諸境は唯(意)言のみであると知つて、それ(に)似た唯心に住し、そこで法界が證せられ、二相が遠離せられる。

とあり、攝大乘論では、隋譯に依ると(對譯攝大乘論六〇一頁)、

彼知^リ諸^ノ義^ヲ唯^ニ意^ニ言^ニ即^チ住^ニ似^ク義^ニ唯^ニ心^ニ中^ニ如^ク是^レ正^ニ證^ニ法^ニ界^ニ已^ニ是^レ故^ニ遠^ニ離^ス二^ノ種^ノ相^ヲ。

となつて居る。前者には二取を伏除するの意味ははつきり現れて居ないが、二取を伏除するのみでなく、これを遠離すると云ふのであるから、それは寧ろ見道に相當するもので、加行位の内容としては、多少行き過ぎた感がある。成唯識論はこの加行位の内容を證明して、二取を伏除するのは、熾頂忍世第一法の四法であるとなし、四尋思と四如實智とを述べて居る。これを攝大乘論に對應

すると、それは五の常修―四尋思と六の正修―四如實智に當る。攝大乘論では、既に述べた如く、信解行地の内容としては、この外に二の三種練磨心を始め、三の滅除四障、四の緣法義、七の無放逸がある。尤も成唯識論に於ても、此等の修行綱目の代りに、こゝに

菩薩於ニ定位ニ 觀ニ影唯是心ニ 義想既滅除 審觀ニ

唯自想ニ

如レ是住ニ内心ニ 知ニ所取非有 次能取亦無 後觸ニ

無所得ニ

の二偈を擧げて居る。これは攝大乘論が彌勒の分別瑜伽論から引いて居るものであるが（對譯攝大乘論六〇頁）、その内容は明に見道に相當する。

第二の見道には、その特色として、

如理通達、故ニ

が掲げられると共に、その内容として、初に見道一般の性質が述べられ（對譯攝大乘論五七頁）、次にこゝに働く根本智と後得智との二智の作用が述べられる（同上五七―八頁）。初の見道一般の性質とは、修行の階段から云へば、菩薩十地の初地である歡喜地に入ることであり、修行の實質から云へば、法界に通達することである。攝大乘論に、陪譯に依ると、

即得レ入ニ歡喜地ニ 善通ニ達ニ法界ニ故、

とあるのがそれである。そして法界に通達するとは、如來の家に生れ、心が衆生や、菩薩や、佛と平等になることに外ならぬ。成唯識論に於ては、加行位の内容が二取を伏除するとせられるのに對して、この通達位のは二取を遠離するとせられる。即ちこゝには

爾時乃名ニ實住ニ唯識眞勝義性ニ 即證ニ眞如ニ智與ニ眞如ニ平等平等ニ 俱離ニ能取所取相ニ故、

とある。その基礎になる唯識三十論頌の第二十八頌では、

Yad-ānubhāvanī vijānāni na-eva upalabdhate tad-ā I

Sāttāni vijānānītrāntre grāhya-abhāve tad-āgrahāt II

識が所緣を全く得しない時は、
唯識義に在り、所取なく能取なきが故に。

となつて居るが、これに相應すると思はれる彌勒五頌の第三では、

Nāstīti citāt param etya buddhya citāsyā nāstītram upatī tasmat I

Dvayasya nāstītram upetya dhinnān sarthīśhate 'vadgati dharmadhātunī II

心の外的ものは無であると覺つて、心の無であることを知る、故に二の無であることを知つて、知者はその(二無)離したる境界に在す。

とあり、攝大乘論では、陪譯に依ると、

以_レ知_ニ心外無_レ有_レ他_故得_レ知_ニ心亦非_レ有_{知者}了_ニ知_ニ俱無_一 即住_ニ無_ニ法界中_一

となつて居る。

次にこゝに働く根本後得の二智の作用に就いて考へると、根本智と云ふのは、止觀に依る出世無漏の無分別智で、三無性を緣じて境となし、その作用に由つて、我々は迷界の根本である有漏の種子を滅して、悟界の根本である無漏の種子を生じ、その結果迷界である阿頼耶識を轉じて、悟界である佛智を得ることになる。後得智と云ふのは、無分別智の後に得られる有分別智で、一切識の種々相を緣じて境となし、その作用に由つて、我々は阿頼耶識から諸識が生じ、諸識から諸相の生じたのが迷界で、それは幻等の如く、識を離れては外にないことを了知し、その結果無倒を得ることになる。成唯識論に於ては、見道に二ありとなし、一を眞見道と云ひ、二を相見道と稱する。即ちこゝに

前眞見道、證_ニ唯識性_一、後相見道、證_ニ唯識相_一、

無着の唯識哲學における中心思想

とある。たゞ唯識三十論頌の第二十八頌に於て、前者のみを説いて、後者を述べないのは、それが二の中では勝れて居るからである。そして眞見道が攝大乘論の根本智であり、相見道がその後得智であることは云ふまでもない。即ちこゝには

前眞見道、根本智攝、後相見道、後得智攝、とある。

猶ほ攝大乘論には、こゝに四種の三度地があつて、四種の順決擇分の依止となることが述べられて居るが、私見に依れば、これは見道に屬するものではなくして、第一の信解行地の後半、即ち成唯識論の所謂加行位に屬するものであらうと考へる。

第三の修道には、その特色として、

對_ニ治_{スル}一切障_ヲ故_一

が掲げられるが、その内容に關しては、不明な所がある(對譯大乘論五九頁)。今漢譯四本を綜合して、修道の内容を考へると、それはその修行の階段から云へば、十地であるが(一)、その能修の智から云へば、三無性を境とし、示觀に依る出世無漏の根本後得の二智である(二)。この二智に依つて、數々修習して、十地を経て、轉依成佛しようとするのが(三)、無着の主張した修道の内容ではな

からうか。そこで私はこの内容の三綱目に就いて説明すべき順序であるが、攝大乘論本には、こゝに不明な所があるから、この説明に先きだつて、その全文を擧げて、嚴密に批判するの必要がある。私見に依れば、その標準となるべき階譯は、次の如くなるべきではなからうかと考へる。

(序)如^レ是入地菩薩、入^ル唯識^ニ故、得^テ見道^ヲ、云何發^ス起修道^ニ、(一)隨所成立說十地、一切修多羅攝、取^リ現住事、(二)通相法爲^テ緣出世間無分別智及其後得奢摩他毗鉢舍那智、無量百千俱胝那由他劫數習故、(三)爲^テ轉依止^ニ得^テ三種佛身^ヲ故修行。

この文の中で、序段に就いては、云ふべきことはないが、第一段の所修の十地の階段に關する部分は、佛が隨所に説いた十地は、凡ての大乘經を包攝し、何れの修行者も皆これを履修すべきものであるから、今の修道もこれに依るべきであるとの意味であらう。こゝで最も問題になるのは、第二段の能修の智に關する部分である。唐譯には、「出世後得止觀智」とあるから、それが單に後得智のみを指したことは明であるか、陳譯には、明に「出世無分別智、及無分別智後所得奢摩他毗鉢舍那智」とあり、魏譯にも、「出世間及藉^テ彼得^テ定慧智」とあるから、二智

を含むのが攝大乘論の原意であると考へ、私は出世間無分別智及其後得奢摩他毗鉢舍那智としたのである。こゝに「通相法爲緣」とあるは、前にも述べた如く、それは三無性を境とするものであると見て、私は無着の主張した修道の智は、三無性を境とし、示觀に依る出世無漏の根本後得の二智であると考へる次第である。第三段の轉依成佛に就いては、序段と同様に、別に問題はないであらう。

成唯識論に於ては、修習位に關し、謂^フ十地中、修^シ十勝行、斷^ツ十重障、證^ス十眞如、二種轉依、由^テ斯證得、

とあるから、修道が數々修習の結果、十地を経て轉依成佛しようとするものであると云ふ點に於ては、攝大乘論と異なる所はない。たゞその能修の智に關しては、

復數修^ス習無分別智^ヲ、
と云ひ、更に

數修^ス此故、捨^ツ三龜重、

とあるから、成唯識論がその能修の智を單に無分別智に限つたことは明である。これはその基礎になる唯識三十論頌の第二十九頌に、

Actho' nupalanbho' sau jhānūni lokotrānīca

tab I
 Āsrayasya paravrttir dviddhā daṣṣṭya hāni-
 tab II

これは無心であり、無得である、又これは出世間智である。所依の轉移がある、二種の危重を捨ててゐるが故に。

とあるのに由るのである。こゝに無得不思議を解釋して、此智遠^レ離^レ所取能取^ヲ、故說^ニ無得及不思議^一、或離^ニ戲論^ヲ、說^テ爲^ス無得^一、妙用難^ク測^ル名^ニ不思議^一、

と云ふが、これは頌に Acitto とあるから、無心とすべきであるが、漢譯の原本には Acintya とあつたから不思議としたものであらう。又出世間智に關しては、斷^ス世間^ヲ故^ニ、名^ニ出世間^ト、二取隨眠^一、是世間本^一、唯此^レ能斷^ス、獨得^ニ出名^一、或出世名^一、依^ニ二義^一立^ツ、謂體無漏^一、及證^ニ眞如^一、此智具^ス斯^レ二種^一義^一故^一、獨名^ニ出世^一、餘智不然^一、

と解釋する。この唯識三十論頌の第二十九頌に相應すると思はれる彌勒五頌の第四では、

Ahuparajñābhūta dhimataḥ samānyātana
 samantāḥ sūā I

Tadaśrīyo gahvaradoṣasmitaḥyo mahāgadenova

無量の唯識哲學における中心思想

viśaṃ nirasyate II (S. A. VI. 9)

常に遍く平等(性)に隨行する無別智力によつて、智者にはそれに依止する深い過集が除かれる、恰も罪が大阿伽陀(藥)によつて除かれるやうに。

とあり、攝大乘論では、隋譯に依ると、

智者無分別智力、平等順行常普遍

所依稠密罪惡聚、如^シ大伽陀拔^ク衆毒^ヲ、

となつて居る。これも唯識論と等しく、修道の智を單に無分別智に限つたものであらう。

第四の究竟道には、その特色として、

無^ニ障礙^一故^一、

が掲げられるが、その内容に關する敘述は、全く見當らない。その性質から云へば、これは三種の佛身であるべきであるが、攝大乘論に於ては、既に述べた如く、修道を説いた終に、「得三種佛身故修行」とあるだけで、究竟道に關しては、別にこれを説いては居ない。尤も修道を説いた後に、菩薩の入正位は聲聞のそれに異ると述べ、十種の差別を擧げて居る。但し漢譯四本の中で、隋譯を除く他の三本は、何れも皆これを十一種の差別とするが、私はこのでは隋譯に従つて、十種として説くであらう。

こゝで問題になるのは、勿論聲聞の正位ではなくして、

それから差別せられるべき菩薩の正位である。この中での前の五種は道に關するもので、これは信解行地から修道に至る行位を説いたものと見ることが出来るやうである。これに對すると、後の五種は果に關するもので、これは無障礙を特色とする究竟道の内容に當るものではなからうか。第一は清淨で、この境地に達すると、煩惱の習氣がなくなるから、その得られた佛土が清淨になる。第二は衆生を成熟せしめる行が休息しないから、そのまゝで心が衆生と平等になる。第三は生に關するもので、如來の家に生れることになる。第四は常に諸佛の大集會の中に攝受せられることになる。第五は最後の果で、十力、無畏不共法等の無量の功德を成就することになる。

成唯識論に於ては、究竟位としては、三種の佛身をば、法身三相として説く。これはその基礎になる唯識三十論の第三十頌で、

Sa eva-anāsturo dhātur acintyaḥ kusalo dhru-
vāḥ ।

Subho vimukti-kāyo'san dharmākhyo'yañ ma-
hāmuhē ॥

これは正しく無漏界である、不思議であり、善であり、常住である、これは安樂であり、解脱身である、

これは大牟尼の法と名けられるものである。とあるのを解釋したものである。この頌に相應すると思はれる彌勒五頌の第五では、

Munivihitasudharmasunyavastko matim upadhāya
samādhanapātān ।

Smṛtīgatin āvagamyā kalpanātrāṇi vrajatī guṇā-
rṇa-vapūramāṣu dhīreḥ ॥ (S. A. VI. 10)

牟尼の成就した善法に安住する賢者は、根のある法界に慧を安んじて、念の及ぶ所は唯分別と弊し、慧に功德海の彼岸に行く。

とあり、攝大乘論では、階譯に依ると、
牟尼善説諸正法、安心有根法界中、
已知三念行唯分別、智者疾至德海岸、
となつて居る。